静岡発 こう読む

▶▶▶加藤　裕治

寛容という文化の継承？

九月二日の本紙一面、島田の元教員、粕谷たか子さんらが出版した絵本が、米国大使館経由で米議会図書館に収蔵されるとの見出しに興味をひかれた。

絵本の題名は「ばらの祈り　死の灰を越えて」。一九五四年に米国が太平洋のビキニ環礁で行った水爆実験で被ばくした、焼津市のマグロ漁船「第五福竜丸」の元乗務員家族を描いたものだ。二〇一八年に出版され、島田市や沼津市の小・中学校にも配布されているようだ。

第五福竜丸の絵本といえば、米国の画家、ベン・シャーンが描いた作品などをもとに、詩人のアーサー・ビナードさんが物語を書いた「ここが家だ　ベン・シャーンの第五福竜丸」も思い出す。「西の空が真っ赤に燃えた」の言葉と共に、その不安と恐ろしさを伝える迫力ある絵画が印象的であった。

また第五福竜丸に関する出来事として、今年三月、吉田町出身の元乗組員で、語り部として活動してきた大石又七さんが亡くなっている。先の粕谷たか子さんが、「ばらの祈り」を作ったきっかけも、大石さんが「アメリカ人は第五福竜丸のことを誰も知らないんだ」と言ったのが忘れられなかったからだという（朝日新聞二〇二一年三月二十三日の記事より）。

大石さんの言葉は、今や日本にも当てはまりつつあるかもしれない。だからこそ児童にも読みやすい絵本によって、この事件が継承されていくことはとても大切だ。

さらに私が関心を持ったのは、米国が「ばらの祈り」を受け入れたことだ。被ばくは米国の水爆実験により引き起こされた。米国側にとっては負の過去である。にもかかわらず、被ばく側から描かれた絵本を議会図書館に収蔵すると決めたことに、米国の寛容さを感じたのである。

自らにとって好ましくないこと、受け入れたくはないもの、またそれらの表現をいったん受け入れること。それこそが寛容さであり、そこから議論＝民主主義は始まる。今、こうした寛容さの文化が消えかけてはいないか。この文化の継承もまた問題である。

（静岡文化芸術大学教授）

2021年9月12日
中日新聞（朝刊）　P.5